

<研究資料>

大学とJクラブの連携によるスポーツボランティア活動の評価： 社会人基礎力に着目して

山下博武¹⁾・行實鉄平²⁾

Evaluation of Sports Volunteering through Collaboration between a University and
a J-League Club : Focusing on "Fundamental Competencies for Working Persons"
Hiromu YAMASHITA¹ Teppei YUKIZANE²

Abstract

Today, following the various changes in society, the needs of developing young people's abilities to adjust to the society are growing. Thus, METI (2006) advocated the "Fundamental Competencies for Working Persons (FCWP)" and implemented a successful model project for evaluating and training this Competencies at universities. Although it has been pointed out that the effects of volunteer work on the Competencies should be investigated, there has been very little practical research as to that of sports volunteering. The three purposes of this study were (1) to plan and practice the "Tokushima Vortis (a J-League club) Game Volunteer Program" in cooperation with the University of Tokushima, (2) to clarify the changes in the students' FCWP, and (3) to evaluate the program to seek for the possibility of sports volunteering to develop this Competencies. Measurement items of the FCWP were set by referring to previous studies, and a questionnaire was distributed to 38 university students (first and third year).

The main research results, and is as follows. Firstly, by analyzing 11 Competency Factors except the "Ability to detect issues" that was reliability and validity, it was found that the students significantly improved the eight skills: the "Initiative," "Ability to influence," "Execution skill," "Planning Skill," "Creativity," "Ability to deliver messages," "Ability to grasp situations," and "Ability to apply rules and regulations." Besides, significant effect sizes were observed in three other Competency Factors. This suggests that sports volunteering has unique developmental effects on FCWP, whereas internships have been thought to increase them. Secondly, the analysis of the gender differences in their ways of change discovered that the "Ability to listen closely and carefully" had a significant interaction, which means sports volunteering opportunities should be set in consideration of gender. Thirdly, there were significant interactions in "Planning Skill," and "Ability to deliver messages," and "Ability to listen closely and carefully" between the grades. This refers that the mentoring system in the sports volunteering system design has favorable effects. And some problem is revealed.

From the above, institutional design of the "three-step configuration" and "mentor system" it could be evaluated from the point of view of society basic skills training of students. In particular, group activities of event planning from the "step" to "jump" is applied effectively. In addition, it can be recognized as a result of evaluating the program by society basic skills also operated issues are extracted in accordance with a particular FCWP and "sex" and "grade".

キーワード：社会人基礎力 スポーツボランティア Jクラブ 大学生

Keyword : society basic skills, sports volunteers, J-League, University Students

1) 筑波大学大学院
〒305-8574 茨城県つくば市天王台1-1-1

1) Tsukuba University
1-1-1 Tennoudai Tsukuba Ibaraki
305-8574 JAPAN

2) 徳島大学大学院ソシオ・アート・
アンド・サイエンス研究部
〒770-8502 徳島県徳島市南常三島町1-1

2) Institute of Socio-Art &
Science, Tokushima University
1-1 Minamijyosanjima Tokushima 770-8502 JAPAN

I. 緒言

現在、産業界における国内市場の成熟化やグローバル競争の激化、IT化の進展、そして、家庭や地域社会の教育力低下などの社会変化に伴い、若者が社会に対応するための能力を意図的に育成する必要性が顕在化している。そこで、2005年に経済産業省は、産学官から有識者を集めた研究会を開催し、2006年に「職場や地域社会の中で多様な人々とともに仕事をしていくために必要な基礎的な力」を「社会人基礎力」として提唱し、2007年に「社会人基礎力育成のススメ」を公表するに至った。その後、7つの大学において、インターンシップなど社会人基礎力の育成・評価を行うモデル事業^{注1)}を実施し、その締めくくりとして、2008年に「社会人基礎力フォーラム2008」を開催している（経済産業省、2008）。

一方、社会人基礎力に関する研究は、比較的新しい概念にも関わらず各研究領域で積極的に研究が行われている。具体的には、社会人基礎力を導入した育成・評価事業の事例報告（福谷・大草、2014）をはじめ、社会人基礎力の変化や差異を質問紙調査で明らかにする定量的な研究（真鍋、2010；本多ら、2012；山岡、2014）、尺度開発の試み（西道、2011）、社会人基礎力の要素間の関係に関する研究（椿ら、2012）などが行われている。

翻って、文部科学省（2002）は、社会全体としてボランティア活動を推進する必要があるとし、全国の大学においてボランティアセンターの設立やボランティアに関連した講義の開講を推奨してきた。辻（2011）は、ボランティア体験型講義を受講した大学生の感想から、ボランティア活動が社会人基礎力の育成に効果があることを示唆し、今後、ボランティア活動の社会人基礎力育成への効果を検討していく必要性を言及している。その他にも、ボランティア活動と社会人基礎力に関する研究は散見されるが、スポーツボランティアに着目した実践的な研究は皆無に等しい。

そこで、本研究では、Jクラブである「徳島ヴォ

ルティス（以下、「ヴォルティス」とする）」と「徳島大学」が協働で開発した「運営ボランティア体験プログラム」に参加した学生の社会人基礎力の変化を明らかにすることで、本プログラムの評価を行うとともにスポーツボランティアを通じた社会人基礎力育成の可能性を探求することを目的とした。

II. 方法

1. 「運営ボランティア体験プログラム」の実施

スポーツボランティアに関する研究は、これまでに、地域スポーツクラブといった日常的な場やマラソン大会といった非日常的な場における活動状況（工藤ら、1995）、ならびに活動意識（松尾、1998）、そして、活動の継続意欲を規定する要因やプロセスの分析（錦ら、1991；山口ら、1989；大山ら、2012）に関する研究が蓄積されている。また、障害者スポーツ活動における活動動機（川元、2000）や役割による意識変容（山田、2007）、大学生の活動動機（金崎、2005；内藤、2007）や組織コミットメント（行實、2008）といった各対象によるその意識変容や効果を明らかにした研究なども散見される。

本研究で取り上げる「運営ボランティア体験プログラム」の実践は、Jクラブのホームゲームという非日常的なイベントに参加する大学生を対象としたものである。Jクラブのボランティアを対象としたものには、その活動内容を報告する事例分析（松野ら、2012）、意識変容プロセス（山下・行實、2015）を明らかにしたものがあるが、大学生の社会人基礎力養成といった教育的効果に着目した実践的な研究は皆無に等しいと言えよう。

さて、本研究におけるプログラムは、徳島大学の「基礎ゼミナール（1年生）」と「総合科学実践プロジェクト（3年生）」の2つの授業を組み合わせて実施されたものであり、各回のボランティア実践を「ホップ（1回目）」、「ステップ（2回目）」、「ジャンプ（3回目）」と段階的に活動レベルを上げていく構成で行われたもの

である。なお、ボランティア実践前には、ヴォルティススタッフによる事前説明会を行い、「ステップ」と「ジャンプ」の間には、これまでの活動経験を踏まえ、さらなるアイデアを生み出すためのグループワークを導入している。このプログラムの概要と授業計画は、表1,2に示す通りである。

本プログラムの具体的な内容を授業計画に沿って示すと、授業の1回目は、オリエンテーション（授業概要）と社会人基礎力について説明し、1年生と3年生混合の少人数グループ（5人前後8グループ）づくりを行った。この少人数グループは、参加学生同士で競争させ、企画を生み出しやすいようにするとともに、3年生が1年生をサポートしていくメンター制度^{注2)}のような効果を意図したものである。なお、本授業の履修生は1年生が15名、3年生が23名であった。

次に、2回目は、「ホップ」の事前説明会として、ヴォルティススタッフからクラブの概要や歴史、当日の実践現場での流れについて説明した。3、4回目は「ホップ」のボランティア実践であり、試合当日は入場口業務（チケットもぎり、マッチデープログラムなどの配布、カウンター作業、缶・瓶に入った飲料のコップへの移し替え作業）、プレイパーク業務（主に子どもが遊べるようなシュートスピード測定ゲーム、キックターゲットゲーム、くじ引きゲームの補助業務）、その他業務（総合案内とグッズ売場での待機列の整理）など比較的簡単な業務に取り組んでもらった。

5回目は、「ステップ」の事前説明会とし、ヴォルティススタッフからクラブが目指す接客技術や態度について説明した。6、7回目は、「ステップ」のボランティア実践で、試合当日は、「ホップ」の業務に加えて、ヴォルティスのマスコットキャラクターである「ヴォルタクン」と「ティスちゃん」がボールパークをグリーティングする際のアテンド業務（写真撮影補助、プレゼントを受け取る、休憩時間を伝える）や、フェイスペイントブースで実際に観戦者にペインティングをする業務などといった「ホップ」より難

易度の高い業務を設定した。

8、9回目は、参加学生に「ホップ」と「ステップ」での経験を活かし「どうすれば観戦者に応援をより楽しんでもらえるか」という課題を提示し、ホームゲームイベントを新たに企画してもらった。この企画は、各グループで検討を重ねた内容をプレゼンテーションという形にまとめ、10回目の授業でヴォルティスの社長に直接提案発表をしてもらった。この発表では、各グループが一つずつ企画を提案し、その中から、最終的には社長、教員、参加学生による投票で4つを選考した。選考された企画は、担当グループを割り振り、11、12、13回目の時間を使って、企画の実施に向けた事前準備を進めていった。

14,15回目は、「ジャンプ」のボランティア実践とし、当日実施された企画は、2つの「ブース企画」、「応援ムービー企画」、「入場体験企画」の4つであった。「ブース企画」とは、スタジアム外のボールパークにテントを3張用意し、徳島大学ブースとして、その中で観戦者に対して、フェイスペイント（顔にヴォルティスのエンブレムや背番号をクラブカラーでペイント）を提供したり、ミサンガ、うちわ、ミニ旗、絵馬づくりを観戦者と一緒に行き、かつ、試合の応援で使用できるようなグッズの制作を行った。「応援ムービー企画」は、事前に観戦者にヴォルティスへの応援メッセージを書いてもらい、それを持って撮影した写真をスライドショーのような動画にして試合のハーフタイム時に放送するという企画を行った。「入場体験企画」は、試合前に実際にゲームが行われる場所を使って、事前応募で当選した観戦者22名を選手に見立てて（ホームチーム11名+アウェイチーム11名）、本番さながらの演出（入場音楽やスタジアムDJによるアナウンス）で入場させ、記念撮影するといった企画を行った。このように、本プログラムでは、学生らしい多様な企画が発案され実施されたわけだが、実際に企画を実施するためには材料の購入、購入した材料の加工、写真撮影、企画実施にかかる段取りなどが綿密に話し合われ、それらの活動は授業外にも学生が自主的に集まり進めていくかたちで行われた。

表1：運営ボランティア体験プログラム概要

内容項目		1回目（ホップ）	2回目（ステップ）	3回目（ジャンプ）
事前説明会	日時	2014年4月18日（金） 10：30～12：00	2014年5月9日（金） 10：30～12：00	2014年7月11日（金） 10：30～12：00
	内容	チームおよび試合企画についての説明	接客態度・技術の紹介、目標設定、サポートスタッフ制度紹介	参加学生より代表取締役社長に企画についてプレゼンテーション
当日内容	日時	2014年4月26日（土） 14：00	2014年5月10日（土） 14：00	2014年8月2日（土） 18：30
	対戦（結果）	徳島vs新潟戦（●1-2）	徳島vsF東京戦（△0-0）	徳島vs甲府戦（△2-2）
	天気	晴，弱風	晴，弱風	雨，弱風
	観客数	6,096人	7,451人	3,594人
	活動内容	入場口，プレイパーク，総合案内，グッズ売場	入場口，プレイパーク，総合案内，グッズ売場，マスコットアテンド，イベント対応	フェイスペイント，ミサング・うちわ・ミニ旗工作，応援ムービー作成，入場体験企画，スタンプラリー

表2：授業目的と授業計画

授業目的	本授業では、プロスポーツチーム「徳島ヴォルティス（サッカー）」の運営サポート活動（ボランティア活動）を通して学生の「前に踏み出す力」, 「考え抜く力」, 「チームで働く力」といった、いわゆる「社会人基礎力」を養うことを目的としている。
授業計画	<ol style="list-style-type: none"> 1. オリエンテーション（社会人基礎力について） 2. プロスポーツチームの歴史とホームタウン活動（地域貢献活動について） 3. プロスポーツチームの運営サポート体験（ホップ1：スタジアム内活動） 4. プロスポーツチームの運営サポート体験（ホップ2：スタジアム内活動） 5. プロスポーツチームの接客対応について 6. プロスポーツチームの運営サポート体験（ステップ1：パーク内活動） 7. プロスポーツチームの運営サポート体験（ステップ2：パーク内活動） 8. プロスポーツチームの運営活動企画1（アイデア創出グループワーク） 9. プロスポーツチームの運営活動企画2（プレゼン作成グループワーク） 10. 企画内容のプレゼンテーション 11. 企画着地に向けたグループワーク 12. 企画運営についてのグループワーク 13. 企画運営準備作業 14. プロスポーツチームの運営サポート体験（ジャンプ1：スタジアム+パーク内活動） 15. プロスポーツチームの運営サポート体験（ジャンプ2：スタジアム+パーク内活動） 16. 総括

2. 本プログラムと社会人基礎力の関係

経済産業省(2006)は、社会人基礎力を「前に踏み出す力」、「考え抜く力」、「チームで働く力」の3つの力で示している。具体的には、まず、「前に踏み出す力」の能力要素として「主体性」、「働きかけ力」、「実行力」の3つを、次に、「考え抜く力」の能力要素として「課題発見力」、「計画力」、「創造力」の3つを、さらに、「チームで働く力」の能力要素として「発信力」、「傾聴力」、「柔軟性」、「状況把握力」、「規律性」、「ストレスコントロール力」の6つを示しており、社会人基礎力を合計12の能力要素で示している。

鈴木ら(2013)は、つくば国際大学の課外活動団体の事例を紹介し、近隣地域のマラソン大会や高等学校の部活動でのトレーナー活動などのスポーツボランティアがスポーツを学ぶ学生の知的好奇心を高める機会になり、責任と自覚、人間関係の構築、リーダーシップや他者との協調性といった社会の中で生き抜くための基本的な能力の涵養に役立つことを示唆している。これに関連して、辻(2011)は、社会人基礎力の向上を意図したボランティア体験型講義を実施し、参加学生の感想文からその効果を考察している。具体的には、ボランティア体験が、参加学生の自主的活動意識を醸成し、コミュニケーション能力などの社会人基礎力の育成に繋がると示している。

以上の研究蓄積から、本プログラムは、ボランティア体験という参加学生の自主的、自発的活動意識を醸成する場であり、現場での実践を伴うことから、「前に踏み出す力」を発現させることができると考えられる。また、参加学生に「どうすれば観戦者に応援をより楽しんでもらえるか」という答えのない課題を提示し、その解決策を考え、新たな企画を創造し、計画していく活動が「考え抜く力」を誘発でき、それらの活動を少人数グループで行うことで、他者とコミュニケーションをとりながら、グループでルールや役割分担を決め、時には他者との衝突も経験するといった行為を繰り返しながら、「チームで働く力」を養うことができると考え

られる。そして、本プログラムを通して、これらの関係性を実証し、その教育的効果を示すことは、スポーツボランティアの新たな可能性を提示することに繋がると言えよう。

3. 社会人基礎力測定項目の検討

経済産業省(2006)は、社会人基礎力を上述のような12の能力要素で示しており、これを受けて各研究領域では、社会人基礎力の育成やその成果を明らかにするための定量的な調査が数多く行われている。西道(2011)は、文部科学省の提言する「職業的発達に関わる諸能力」と社会人基礎力の概念整理を行い、15の能力要素を想定した合計45項目の測定尺度を開発し、椿ら(2012)は、コミュニケーション能力に特化した7の能力要素を想定した35項目の測定尺度を開発している。一方、経済産業省(2010, p.39)は12の能力要素それぞれに3項目ずつ設定した36項目からなる評価シート(測定尺度)を示しており、「社会人基礎力が発揮できた例」としてまとめられたその報告書は、数多くの実践において事業評価項目として活用されている。

そこで、本研究では、この評価シートをベースに測定項目を作成することとした。まず、測定項目の妥当性を確保するために、共同研究者と議論し、本調査の内容に合わせたワーディングを施した。また、参加学生のスポーツボランティアを通じた社会人基礎力の変化を測定するため、詳細は後述するが、活動前・後の2回に分けた調査デザインを設定し、調査のタイミングに合わせたワーディング(語尾の変更)の工夫を行った。

以上のような手続きで設定した社会人基礎力の12能力要素を測定する各3項目、合計36項目を示したものが表3である。なお、36項目それぞれの測定スケールには、「4.非常にそう思う」、「3.そう思う」、「2.あまりそう思わない」、「1.まったくそう思わない」といったリッカート型尺度の4段階評定を用いた。さらに、その数量化にあたっては、4段階評定順にそれぞれ4, 3, 2, 1の得点を与え、これらの段階は間隔尺度を構成するものと仮定した上で各種分析を進めた。

表3：作成した社会人基礎力測定項目

構成概念	測定項目
前に踏み出す力	1.自分がやるべきことは何かを見極め、自発的に取り組むことができている
	2.自分の強み・弱みを把握し、困難なことでも自信を持ってとりくむことができている
	3.自分なりに判断し、他のグループメンバーに流されずに行動できている
	4.グループメンバー間で協力する必要性を伝える（説明する）ことができている
	5.状況に応じた言葉かけを意識してグループメンバーの参加を促す発言ができている
	6.グループ内の沈黙、軋轢、混乱を解消する発言ができている
実行力	7.小さな成果に喜びを感じ目標達成に向かって粘り強く取り組み続けることができている
	8.失敗を恐れずに、とにかくやってみようとする果敢さを持って、取り組むことができている
	9.強い意志を持ち、困難な状況から逃げずに取り組み続けることができている
課題発見力	10.企画のイメージを明確にし、その実現の為に現段階でなすべきことを把握できている
	11.現状（自分たちの準備状況）を正しく認識するための情報収集や分析ができている
	12.企画に対する課題（問題）を明確にするために、他者の意見を積極的に求めている
考え抜く力	13.作業プロセスを明確にし、優先順位をつけた現実性の高い計画を立案できている
	14.常に計画と進捗状況の違いに留意することができている
	15.進捗状況や不測の事態に合わせて柔軟に計画を修正できている
創造力	16.複数のものを組み合わせる新しいものを作り出すことができている
	17.従来の常識や発想を転換し、新しいものをつくりだすことができている
	18.成功イメージを常に意識しながら、新しいものを生み出すためのヒントを探している
発信力	19.事例や客観的なデータ等を用いて、具体的にわかりやすく伝えることができている
	20.聞き手がどのような情報を求めているのかを理解して伝えることができている
	21.話そうとすることを自分なりに十分に理解して伝えている
傾聴力	22.内容の確認や質問等を行いながら、相手の意見を正確に理解することができている
	23.相槌や共感等により、相手に話しやすい状況を作ることができている
	24.相手の話を素直に聞くことができている
チームで働く力	25.自分の意見を持ちながら他人の良い意見も共感を持って受け入れることができている
	26.相手がなぜそのように考えるのかを相手の気持ちになって理解することができている
	27.立場の異なる相手の背景や事情を理解することができている
状況把握力	28.周囲から期待されている自分の役割を把握して、行動することができている
	29.自分にできること、他人ができることを的確に判断して行動することができている
	30.周囲の人の状況に配慮して、良い方向へ向かうよう行動することができている
規律性	31.相手に迷惑をかけないよう、最低限守るべきルールや約束マナーを理解できている
	32.相手に迷惑をかけたとき、適切な行動を取ることができている
	33.規律や礼儀が特に求められる場面では粗相のないように正しくふるまうことができている
ストレスコントロール力	34.ストレスの原因を見つけた場合、自ら又は他人の力を借りて取り除くことができている
	35.他人に相談したり別のことに取り組んだりして、ストレスを一時的に緩和できている
	36.ストレスを感じることは一過性又は当然のことと考え重く受け止めないようにできている

4. 社会人基礎力測定スケールの検証方法

各測定項目について得点分布の偏りを確認するために、平均値、標準偏差、フロア効果、天井効果を確認した。また、項目の異質性検討のためにI-T分析、内容的妥当性検討のためにG-P分析を実施した。加えて、測定項目の信頼性および妥当性を検証するために、各能力要素(3項目)で主成分分析を行うとともに、クロンバック α 係数(Cronbach's coefficient alpha)を算出した。なお、本研究では、研究目的上、社会人基礎力の概念枠組みを指定することから、探索的な統計手続きは行わずに確認的な統計手続きを実施することにした。

5. 分析の方法

分析の方法については、まず、ボランティア活動前・後における社会人基礎力の変化を検証するために、各能力要素3項目の合計得点を算出し、t検定を用いて活動前・後について「全体」で平均値の比較を行った。次に、本研究結果より本プログラムの評価を行うために、実施者がコントロール不可能な個人の価値観や性格ではなく、「性別」と「学年」といった要因による変化の違いを分析することとした。具体的には、「性別(男性・女性)」と「学年(1年生・3年生)」といった要因の、活動前・後の社会人基礎力変化への影響を測るために二元配置分散分析を実施し、その交互作用について検討を試み

た。さらに、交互作用が認められた能力要素では、下位検定として「活動前後」と「性別(男性・女性)」、「学年(1年生・3年生)」の単純主効果について検討を行った。

また、平均値差を推定するあらゆる推測統計によって得られた結果としてのp値はサンプルサイズの影響を受けやすいこと、p値は効果の大きさを示す指標ではないことが指摘されていることから(水本・竹内, 2008)、本研究では活動前・後の実質的な社会人基礎力の変化を表す統計的な指標として「効果量(effect size: ES)」を用いて検討を加えることとした。ちなみに、この効果量は、「効果の大きさ」のことを指し、実験的操作(experimental manipulation)の効果や変数間の関係の強さ(strength of association)を表す指標であるとされている(Field・Hole, 2003)。そこで、「全体」の活動前・後の差の効果量を求めるため、Field(2005)の推奨する、r familyの指標を用いて検討を行い、「性別」と「学年」については、先行研究の慣例に従い η^2 の値を用いて分析を進めた。なお、t検定における効果量rの計算は、t値と自由度によって以下のように計算され、 η^2 の値は以下のように2つの平方和によって計算される。また、効果量の解釈の目安は、「効果量小」を $r = .10$ 、 $\eta^2 = .01$ 、「効果量中」を $r = .30$ 、 $\eta^2 = .06$ 、「効果量大」を $r = .50$ 、 $\eta^2 = .14$ を基準とした(Cohen, 1988)。

$$r = \sqrt{\frac{t^2}{t^2 + df}} \quad \eta^2 = \frac{\text{ある要因の平方和 (SS effect)}}{\text{全体平方和 (SS total)}}$$

6. 調査方法(データの収集法)

データの収集は、プログラムに参加した徳島大学の1年生と3年生38名を対象に、質問紙調査を実施した。具体的には、5月10日(土)FC東京戦で実施された2回目のボランティア活動(ステップ)の終了後に、試合会場の学生控え室において質問紙を配布、記入してもらい、その場で回収しデータを収集した。また、8月2日(土)ヴァンフォーレ甲府戦で実施された

3回目のボランティア活動(ジャンプ)の終了後に、前回同様の調査方法によりデータを収集した。なお、本研究においては、5月10日(土)に収集したデータを「活動前」とし、8月2日(土)に収集したデータを「活動後」のデータとして取り扱うこととした。これは、「ステップ」までの活動内容がヴォルティススタッフから指示された業務であるのに対し、「ジャンプ」では参加学生が自ら考えた企画に取り組む業務内

容となっていることを考慮したためである。また、質問紙の調査内容は、上述の社会人基礎力測定項目に加えて、「学年」、「性別」、「グループ」、「各回のボランティア実践での目標設定（自由記述）」、「授業に参加して良かった・嫌だったと思うこと（自由記述）」、「グループメンバーに対する意見・感想（自由記述）」、「授業に対する意見・感想（自由記述）」といった項目を設定し、その後の考察に加えることで、結果の詳細な記述を目指した。なお、調査で得られた自由記述は、以下では「 」で示すこととする。

有効回収標本数（回収率）は、「ステップ」が37枚（97.4%）、「ジャンプ」が34枚（89.5%）であったことから、社会人基礎力に関する分析には、2回の調査において回答している有効回収標本数34枚（89.5%）を使用した。なお、「性別」は「男性14名」（41.2%）、「女性20名」（58.8%）、「学年」は「1年生14名」（41.2%）、「3年生20名」（58.8%）であった。また、学年ごとの男女数は、「1年生男性8名」（23.5%）、「1年生女性6名」（17.6%）、「3年生男性6名」（17.6%）、「3年生女性14名」（41.2%）となっている。

Ⅲ. 結果・考察

1. 社会人基礎力測定項目の信頼性・妥当性の検証

本研究では、測定項目の信頼性・妥当性を検証するために平均値、標準偏差、フロア効果、天井効果、I-T分析、G-P分析を用いて測定項目を確認し、その結果を踏まえて主成分分析とクロンバック α 係数（Cronbach's coefficient alpha）を算出した（表4）。

その結果、まず、平均値は2.65から3.44の範囲となり、標準偏差は0.49から0.77の範囲が示された。次に、フロア効果については各項目の平均値に標準偏差を減じた値が最小値を下回る項目はなく、天井効果にも各項目の平均値に標準偏差を加えた値が最大値を上回る項目はなかった。そして、I-T分析として36項目合計点と各項目の相関係数を算出し、全ての項目で正

の相関を確認することができた。最後に、G-P分析では、36項目の合計得点の上位25%に含まれるものをG群、下位25%に含まれるものをP群として、2群の平均値の比較を行ったが、いずれの項目においてもG群がP群に比べて得点が高いことを確認できた。

主成分分析については、いずれの能力要素においても第一主成分のみが抽出され、固有値は1.55から2.44の範囲で、分散は46.88から80.88の範囲で示された。そして、信頼性分析では、 α 係数が0.42から0.88の値で示された。 α 係数での内的整合性の判断については、小塩（2011）が0.50を切るような尺度は再検討するべきであるとしていることから、0.42という低い値が示された「課題発見力」を削除し、最終的には11の能力要素で分析を進めることとした。

2. 「全体」にみる社会人基礎力の変化

表5は、「運営ボランティア体験プログラム」の活動前・後における社会人基礎力の全体的な変化を示したものである。その結果、いずれの能力要素においても活動後が高い値を示しており、「主体性」、「働きかけ力」、「実行力」、「計画力」、「創造力」、「発信力」、「状況把握力」、「規律性」といった8要素において有意な差が認められた。また、効果量を表す r 値は.18から.69の範囲で示され、「主体性」、「計画力」、「状況把握力」、「規律性」といった4要素において「効果量大」の変化が、「働きかけ力」、「実行力」、「創造力」、「発信力」、「ストレスコントロール力」といった5要素に「効果量中」の変化が、「傾聴力」、「柔軟性」といった2要素に「効果量小」の変化があり、本プログラムの社会人基礎力育成への効果が示された。

翻って、経済産業省（2010, p.104-143）は、「社会人基礎力教育の5段階ステップモデル」を示しており、具体的には、外部の人間から仕事や課題を依頼してもらおう「第一ステップ」、与えられた課題を繰り返し解釈させる「第二ステップ」、グループで活動する「第三ステップ」、活動後に社会人基礎力がいかに重要なものか価値付けを行い振り返ってもらおう「第四ステップ」、

表4：測定項目の記述統計，主成分分析， α 係数

測定項目		平均値	標準偏差	負荷量	固有値分散 α 係数		
前に踏み出す力	主体性	自発的に取り組めた	3.00	0.49	.817	1.94	
		困難なことでも自信を持って取り組めた	2.85	0.66	.846	64.70	
		他メンバーに流されずに行動できた	3.03	0.63	.747	0.72	
	働きかけ力		メンバー間で協力する必要性を伝えられた	2.94	0.69	.733	1.86
			メンバーの参加を促す発言ができた	2.79	0.73	.850	62.11
			沈黙，軋轢，混乱を解消する発言ができた	2.79	0.77	.777	0.69
	実行力		目標に向かって粘り強く取り組み続けられた	3.26	0.57	.840	2.11
			失敗を恐れずに果敢さを持って取り組めた	3.00	0.65	.889	70.22
			困難な状況から逃げずに取り組み続けられた	2.82	0.67	.781	0.78
考え抜く力	課題発見力	企画実現のためになすべきことを把握できた	3.03	0.52	.712	1.41	
		現状認識のため情報収集や分析ができた	2.88	0.59	.786	46.88	
		他者の意見を積極的に求めた	3.06	0.60	.530	0.42	
	計画力		実現性の高い計画を立案できた	2.74	0.67	.623	1.55
			計画と進捗状況の違いに留意できた	2.65	0.65	.793	51.60
			柔軟に計画を修正できた	2.82	0.63	.729	0.53
	創造力		複数を組み合わせて新しいものを作り出せた	2.79	0.69	.872	2.32
			常識や発想を転換し新しいものをつくりだせた	2.82	0.72	.888	77.34
			新しいものを生み出すためのヒントを探せた	2.88	0.77	.878	0.85
発信力		具体的にわかりやすく伝えられた	2.65	0.69	.696	1.69	
		聞き手を理解して伝えられた	2.88	0.59	.845	56.24	
		話そうとすることを自分なりに理解して伝えた	3.21	0.59	.699	0.60	
傾聴力		相手の意見を正確に理解できた	2.94	0.74	.739	1.87	
		相手に話しやすい状況を作れた	3.15	0.61	.794	62.39	
		相手の話を素直に聞いた	3.44	0.56	.834	0.68	
チームで働く力	柔軟性	他人の良い意見も共感を持って受けられた	3.32	0.59	.842	2.43	
		相手の気持ちになって理解できた	3.21	0.59	.936	80.88	
		立場の異なる相手の背景や事情を理解できた	3.15	0.61	.917	0.88	
状況把握力		自分の役割を把握して行動できた	2.91	0.62	.864	2.16	
		できることを的確に判断して行動できた	3.03	0.63	.940	71.87	
		周囲の人の状況に配慮して行動できた	3.12	0.59	.726	0.80	
規律性		守るべきルールや約束マナーを理解できた	3.29	0.63	.902	2.44	
		迷惑をかけたとき適切な行動を取れた	3.21	0.59	.904	81.22	
		粗相のないように正しくふるまえた	3.18	0.63	.897	0.88	
ストレスコントロール力		ストレスの原因を自他の力で取り除けた	2.82	0.67	.909	2.41	
		ストレスを一時的に緩和できた	3.00	0.74	.922	80.30	
		ストレスを重く受け止めないようにできた	3.09	0.67	.856	0.88	

n=34 ※各能力要素の測定項目は要約したものを示している

活動の途中で価値付けと振り返りを行う「第五ステップ」というものがある。

それになぞらえ本プログラムを改めて確認してみると、「第一ステップ」は、1回目の説明会において、ヴォルティススタッフ（外部の人間）から参加学生に対して「どうすれば観戦者に応援をより楽しんでもらえるか」という課題を提示したことにあたる。「第二ステップ」は、実際にスタジアムで活動した経験をもとに新しい企画を考えてもらうことで、提示された課題を繰り返し解釈・意識してもらったことにあたる。「第三ステップ」は、少人数グループをつくって活動を進めていったことにあたる。「第四ステップ」は、プログラムの最後に各グループで活動を振り返る時間（総括の時間）を設けたことにあたる。「第五ステップ」は、段階毎にワークシートを用いて活動の振り返りを行ってもらったことにある。このような一連の流れは、「社会人基礎力教育の5段階ステップモデル」の枠組みに当てはまり、参加学生の社会人基礎力の変化を創出させたと考えられる。

今回、有意に向上した能力要素の中でも「主体性」、「計画力」、「状況把握力」、「規律性」といった4要素は、効果量についても「効果量大」の変化が示されている。

具体的にその結果について考察すると、まず、第一に、「主体性」は、他の能力要素のベースになる力であり、ある目標を達成するために得た知識が「主体性」を高める働きをするとされている（経済産業省、2010、p.40-42）。本プログラムでは、事前説明会においてヴォルティススタッフがクラブの概要や課題を説明し、実際にスタジアムでの活動を通してその課題を認識してもらった。このことは、授業に対する意見・感想として「自分たちで考えた企画を持っていくのが面白かった。たくさんのが学べた」と参加学生が認識していることから、クラブの課題に対して自分たちの考えた企画に挑戦できるといった面白さが彼らの目的意識を引き出し、それに取り組む過程が「主体性」を効果的に高めたと考えられる。

第二に、「計画力」は、見えない目的を見え

る目標に変えて、実行可能にしていく能力であり、段取りを付ける力であるとされている（経済産業省、2010、p.48-49）。参加学生は、自ら企画したイベントをスタジアムで実施するために、材料を購入したり、観戦者への対応手順を考えたり、ヴォルティススタッフと細かな点を調整したり、その作業は授業の時間外にも行われた。このことは、授業に対する意見・感想として「詰めの甘い部分が多々あり、気をつけるべき部分などヴォルティス以外のところでも分かったことが多かったと思います」と参加学生が感じていることから、参加学生が「詰めの甘い部分」を認識できるまでに「計画力」を養ったことが確認できる。

第三に、「状況把握力」は、期待されている自分の役割を正しく理解したり、状況に応じて行動へ素早く転換したりするといった人間関係を形成していく基本的な非言語コミュニケーションの能力である（経済産業省、2010、p.53-54）。参加学生は、「自分にできることを状況を見て判断する」、「融通をきかせる。言葉遣いをきれいに」、「全力で担当する企画に取り組み一人でも多くの人に楽しんでもらう」といった目標を設定していた。そして、グループメンバーに対する意見・感想として「リーダーが中心を担ってそれぞれが自分の役割を全うしながら企画を作っていく作業が心地よかった」と記述しており、授業に参加して良かったと思うこととして「多くのお客様と関わられた」を挙げている。これらのことから、参加学生は、自分たちの企画を成功させるために、状況に応じた柔軟な対応ができるように目標をたて、現場ではそれぞれの役割を全うし、実際に多くの観戦者に企画を提供することでこの能力を高めたと考えられる。

第四に、「規律性」はルールや約束、マナーを理解し守ることができる力であるとされている（経済産業省、2010、p.55）。本プログラムは、大学の外で一般の観戦者にサービスを行うこともあり、担当教員やヴォルティススタッフから、「ヴォルティスの運営スタッフである自覚と責任を持ち活動に取り組んでもらう」ように強く

求められ、このような呼びかけが効果的であったと考えられる。このことは、参加学生が「言葉遣いや行動でお客様に不快な気持ちにさせないのはもちろん、お客様に積極的にアプローチして楽しんでもらう」、「責任をもって行動する」、「スタッフとしての責任をもって行動する」といった目標設定をしていることから、参加学生がヴォルティススタッフの一員として責任を持ち、観戦者に接するという緊張感を持って、グループでルールを守り協働する中でより育まれたものと理解できる。

一方で、真鍋（2010）は、インターンシップの体験内容を「日常業務型」と「課題設定型」の2タイプに分類し、社会人基礎力の変化の違いを検討しており、「日常業務型」では、全ての能力要素が有意に向上し、「課題設定型」では、「主体性」、「実行力」、「課題発見力」、「発信力」の4要素が有意に向上したことが示されている。

この分類に従えば、本プログラムは「課題設定型」に位置づけられるが、「主体性」、「実行力」、「課題発見力」、「発信力」の他にも「働きかけ力」、「計画力」、「創造力」、「状況把握力」、「規律性」といった能力要素も有意な向上が確認された。このような変化の相違が、インターンシップなどの就職活動を意識した活動ではなく本プログラムを通して示されたことは、スポーツボランティアの一つの実践的な可能性として示唆を与えてくれよう。参加学生は、授業に対する意見・感想として「楽しくてやりがいがあった」と記述していることから、見るスポーツのボランティアという非日常的体験に関わる活動が楽しみややりがいを創出し、また、「自分たちが企画したものが実際に形になっていく過程は、大変こともあったけど、やり終えてみて充実感が大きく、授業を通して一步成長したように思う」という記述から、自主企画の一連の活動が多くの能力要素を育成したものと考えられる。

表5：「全体」にみる社会人基礎力の変化

能力要素	活動前		活動後		t検定		効果量	
	M	SD	M	SD	t値	p値	r値	
主体性	8.88	1.43	9.68	1.22	-3.86	.001 **	.56	大
働きかけ力	8.53	1.73	9.15	1.62	-2.09	.044 *	.34	中
実行力	9.09	1.58	9.74	1.54	-2.09	.045 *	.34	中
計画力	8.21	1.39	9.38	1.44	-5.52	.000 ***	.69	大
創造力	8.5	1.91	9.21	1.82	-2.43	.021 *	.39	中
発信力	8.74	1.40	9.41	1.37	-2.85	.008 **	.44	中
傾聴力	9.53	1.50	9.88	1.49	-1.44	.160 n.s.	.24	小
柔軟性	9.68	1.61	9.97	1.57	-1.06	.299 n.s.	.18	小
状況把握力	9.06	1.56	10.06	1.37	-3.70	.001 **	.54	大
規律性	9.68	1.67	10.59	1.33	-3.68	.001 **	.54	大
ストレスコントロール力	8.91	1.87	9.53	1.67	-1.94	.061 n.s.	.32	中

自由度=33 (n=34) * : p<.05 ** : p<.01 *** : p<.001 n.s. : no significance
 小 : r>|.10| 中 : r>|.30| 大 : r>|.50|

3. 「性別」にみる社会人基礎力の変化

表6は、「性別」と社会人基礎力の変化（活動前・後）の二元配置分散分析の結果を示したものである。その結果、「傾聴力」に有意な交互作用が認められ、単純主効果の検定では、男性は女性に対してこの能力要素を有意に向上させたことが分かった。また、交互作用の効果量 η^2 値は、0.00から0.12の範囲で示され、「傾聴力」、「ストレスコントロール力」といった2要素に「効果量中」の変化が、「計画力」、「創造力」、「柔軟性」、「状況把握力」、「規律性」といった5要素に「効果量小」の変化があった。これらのことから、「傾聴力」の変化には「性別」による影響があったものと判断できる。そして、「傾聴力」について、男性は平均値を9.21（活動前）から10.14（活動後）と向上させているのに対して、女性は9.75（活動前）から9.70（活動後）と若干低下させている。男性の参加学生は、授業に参加して良かったと思うこととして

「コミュニケーション力が上がった」、「コミュニケーション力の向上」などを記述しており、女性にはそのような記述が見られない。「傾聴力」は、自分の頭の中で相手の言ったことを再構築し理解できるかどうか、相手の中からその人の言いたいことを引き出せるかどうかといった能力であり、この能力のベースには自尊感情が高いことが必要であるとされている（経済産業省, 2010, p.56-57）。このことは、本多ら(2012)の社会人基礎力の性差に関する調査結果において、男性に比べ女性の全ての社会人基礎力が低かったことを女性が自尊感情を低く見積もる可能性が影響していると考察しているように、社会人基礎力の育成の際には、性差について配慮する必要があると言える。本研究結果からは、特に、「傾聴力」の育成については、女性の自尊感情を考慮した活動サポートが重要であるという実践的な示唆が得られた。

表6：「性別」にみる社会人基礎力の変化

能力要素	男性 (n=14)		女性 (n=20)		交互作用		効果量 η^2 値	活動前後の単純主効果		性別の単純主効果	
	活動前	活動後	活動前	活動後	F 値	p 値		男性 p 値	女性 p 値	活動前 p 値	活動後 p 値
主体性	9.00 (1.62)	9.86 (1.35)	8.80 (1.32)	9.55 (1.15)	0.06	.802 n.s.	.00 ほとんどなし	.013 *	.010 *	.695 n.s.	.480 n.s.
働きかけ力	8.36 (1.74)	8.86 (1.99)	8.65 (1.76)	9.35 (1.31)	0.11	.745 n.s.	.00 ほとんどなし	.292 n.s.	.083 n.s.	.634 n.s.	.390 n.s.
実行力	9.36 (1.65)	9.93 (1.39)	8.90 (1.55)	9.60 (1.67)	0.04	.842 n.s.	.00 ほとんどなし	.252 m.s.	.098 n.s.	.416 n.s.	.549 n.s.
計画力	8.50 (1.83)	9.93 (1.39)	8.00 (0.97)	9.00 (1.38)	0.98	.330 n.s.	.03 小	.000 ***	.001 **	.308 n.s.	.062 n.s.
創造力	8.93 (1.64)	10.00 (1.24)	8.20 (2.07)	8.65 (1.98)	1.11	.300 n.s.	.03 小	.024 *	.244 n.s.	.281 n.s.	.031 *
発信力	9.21 (1.37)	10.00 (1.30)	8.40 (1.35)	9.00 (1.30)	0.14	.707 n.s.	.00 ほとんどなし	.044 *	.065 n.s.	.095 n.s.	.034 *
傾聴力	9.21 (1.63)	10.14 (1.46)	9.75 (1.41)	9.70 (1.53)	4.21	.048 *	.12 中	.016 *	.871 n.s.	.313 n.s.	.403 n.s.
柔軟性	9.43 (1.70)	9.93 (1.44)	9.85 (1.57)	10.00 (1.69)	0.38	.545 n.s.	.01 小	.262 n.s.	.685 n.s.	.461 n.s.	.898 n.s.
状況把握力	9.00 (1.57)	10.29 (1.59)	9.10 (1.59)	9.90 (1.21)	0.78	.385 n.s.	.02 小	.005 **	.031 *	.857 n.s.	.427 n.s.
規律性	9.57 (1.91)	10.79 (1.12)	9.75 (1.52)	10.45 (1.47)	1.05	.314 n.s.	.03 小	.004 **	.037 *	.763 n.s.	.477 n.s.
ストレスコントロール力	8.43 (2.14)	9.64 (1.60)	9.25 (1.62)	9.45 (1.76)	2.57	.119 n.s.	.07 中	.018 *	.626 n.s.	.211 n.s.	.746 n.s.

上段：平均値、下段：標準偏差 *：p<.05 **：p<.01 ***：p<.001 n.s.：no significance 小： $\eta^2>|.01|$ 中： $\eta^2>|.06|$ 大： $\eta^2>|.14|$

4. 「学年」にみる社会人基礎力の変化

表7は、「学年」と社会人基礎力の変化（活動前・後）の二元配置分散分析の結果を示したものである。その結果、「計画力」、「発信力」、「傾聴力」といった3要素に有意な交互作用が認められた。それら3要素の単純主効果の検定では、いずれの能力要素も活動前では、1年生が3年生に対して有意に低い値を示しており、活動後では、その差が認められない。そして、「計画力」では、1年生と3年生ともにこの能力要素を有意に高めており、「発信力」と「傾聴力」では、1年生が3年生に対してこの能力要素を有意に向上させていることが示された。また、交互作用の効果量 η^2 値は、0.01から0.26の範囲で示され、「計画力」、「発信力」、「傾聴力」といった3要素において「効果量大」の変化が、「創造力」、「柔軟性」、「ストレスコントロール力」といった3要素に「効果量中」の変化が、「主体性」、「働きかけ力」、「実行力」、「状況把握力」、「規律生」といった5要素に「効果量小」の変

化があった。これらのことから、「学年」によっても特定の能力要素において変化の違いがあることが明らかになった。

特に、「計画力」、「発信力」、「傾聴力」については、3年生に比べ1年生の方が大きく向上していることが示された。本プログラムでは、1年生と3年生の混合の少人数グループで授業を進めることでメンター制度のような役割を意図していた。そのため、3年生が、グループメンバーに対する意見・感想として「3年生はグループをまとめることを頑張っていたと思う。1年生は初めはやる気が感じられないこともあったが、徐々に積極的になっていったように思う」と認識しているように、3年生がグループ内でリーダーシップを発揮し、1年生をサポートしてくれた結果、1年生の積極性を引き出し、効果的に社会人基礎力を育成することができた。そして、「計画力」、「発信力」、「傾聴力」といった能力要素を特に高めたものと考えられる。

表7：「学年」にみる社会人基礎力の変化

能力要素	1年生 (n=14)		3年生 (n=20)		交互作用		効果量 η^2 値	活動前後の単純主効果		学年の単純主効果	
	活動前	活動後	活動前	活動後	F値	p値		1年生 p値	3年生 p値	活動前 p値	活動後 p値
主体性	8.64 (1.50)	9.21 (1.12)	9.05 (1.40)	10.00 (1.21)	0.81	.374 n.s.	.03 小	.085 n.s.	.001 **	.422 n.s.	.064 n.s.
働きかけ力	7.71 (1.44)	8.64 (1.01)	9.10 (1.71)	9.50 (1.88)	0.77	.387 n.s.	.02 小	.053 n.s.	.309 n.s.	.019 *	.130 n.s.
実行力	8.79 (1.42)	9.64 (1.28)	9.30 (1.69)	9.80 (1.74)	0.32	.579 n.s.	.01 小	.089 n.s.	.230 n.s.	.359 n.s.	.775 n.s.
計画力	7.57 (1.34)	9.29 (1.07)	8.65 (1.27)	9.45 (1.67)	5.00	.032 *	.14 大	.000 ***	.005 **	.018 *	.748 n.s.
創造力	7.93 (1.69)	9.29 (1.68)	8.90 (2.00)	9.15 (1.95)	3.80	.060 n.s.	.11 中	.004 **	.498 n.s.	.147 n.s.	.835 n.s.
発信力	8.07 (0.83)	9.43 (1.34)	9.20 (1.54)	9.40 (1.43)	6.73	.014 *	.17 大	.000 ***	.490 n.s.	.018 *	.953 n.s.
傾聴力	8.71 (1.27)	9.93 (1.27)	10.10 (1.41)	9.85 (1.66)	11.28	.002 **	.26 大	.001 **	.378 n.s.	.006 **	.883 n.s.
柔軟性	9.29 (1.44)	10.21 (1.53)	9.95 (1.70)	9.80 (1.61)	3.96	.055 n.s.	.11 中	.033 *	.669 n.s.	.242 n.s.	.456 n.s.
状況把握力	8.50 (1.40)	9.64 (1.39)	9.45 (1.57)	10.35 (1.31)	0.19	.665 n.s.	.01 小	.012 *	.017 *	.079 n.s.	.141 n.s.
規律性	9.29 (1.49)	10.50 (1.29)	9.95 (1.76)	10.65 (1.39)	1.05	.314 n.s.	.03 小	.004 **	.037 *	.258 n.s.	.751 n.s.
ストレスコントロール力	8.07 (1.90)	9.29 (1.49)	9.50 (1.64)	9.70 (1.81)	2.57	.119 n.s.	.07 中	.018 *	.626 n.s.	.025 *	.486 n.s.

上段：平均値、下段：標準偏差 *：p<.05 **：p<.01 ***：p<.001 n.s.：no significance 小： $\eta^2>|.01|$ 中： $\eta^2>|.06|$ 大： $\eta^2>|.14|$

具体的に、「計画力」とは段取りをつける力であり、他の能力要素に比べて実務的な側面が強いものである。1年生のグループメンバーに対する意見・感想として「3年生の先輩方が積極的に会話や進行をしてくださってやりやすかったです」という記述があるように、グループ内では3年生が中心となって活動が展開されていたこと。このことから、「計画力」は、実務的で模倣可能性が高く、メンター制度により効果的に育成できることが示されたと言える。

「発信力」とは、自身の知識を分かりやすく、かつ説得的に相手に伝える能力とされている(経済産業省, 2010, p.58-59)。1年生は、グループメンバーに対する意見・感想として「先輩方は1年生でも話やすいようにしてくれた」と記述していることから、3年生が1年生でも発言しやすい環境を整えてくれたことで、1年生はこの能力要素を効果的に向上させることができたと考える。また、そのような3年生のサポートが、グループ活動での議論を活発化させ、1年生の「傾聴力」を効果的に育成できたと考えられる。

以上のことから、メンター制度を意図した活動展開により、1年生の社会人基礎力を効果的に育成できたことが示唆された。しかし、今回の調査では、3年生への育成効果を示す結果が得られなかった。例えば、3年生は、1年生をサポートしようと積極的にグループ内での発言を促すなどしており、「前に踏み出す力」や「チームで働く力」をより発現できると想定できる。今後は、1年生だけでなくメンターとなる3年生の社会人基礎力育成を促すような活動展開を検討することが課題として認識できる。

IV. 結論

本研究では、スポーツボランティアを通じた社会人基礎力育成の可能性を探求するために、測定項目の検討および本プログラムに参加した学生を対象に社会人基礎力の測定を試みた。その結果は、以下のように要約することができる。

第一に、本研究では、社会人基礎力の仮説的構成概念として12次元を想定し、12次元36項目によって質問紙調査を実施した。その後の統計的解析では、「課題発見力」を除く11次元に修正された。このことから、今回のスポーツボランティアに関する社会人基礎力には、「課題発見力」を見出すことができなかったが、11次元からなる社会人基礎力の変化を測定することができたと言える。

第二に、社会人基礎力の変化として、「全体」では、「主体性」、「働きかけ力」、「実行力」、「計画力」、「創造力」、「発信力」、「状況把握力」、「規律性」の8要素を有意に向上させており、その他の3要素についても効果量を確認することができた。このことから、スポーツボランティアによる社会人基礎力の育成効果は、従来の就職活動を意識したインターンシップなどを通して養われたそれとは異なる様相で発現することが示唆された。

第三に、「性別」による変化の違いを分析した結果、「傾聴力」に有意な交互作用が認められ、「傾聴力」育成のために女性の自尊感情に配慮したスポーツボランティア実施の必要性が示唆された。

第四に、「学年」による変化の違いを分析した結果、「計画力」、「発信力」、「傾聴力」に有意な交互作用が認められ、スポーツボランティア制度設計におけるメンター制度の特に「計画力」、「発信力」、「傾聴力」への効果が示された。

以上のことから、本プログラムの「3段階構成」、「メンター制度」といった制度設計は、参加学生の社会人基礎力育成という観点から一定の評価が得られたと言えよう。特に、「ステップ」から「ジャンプ」に至るまでの自主企画のグループ活動は、効果的に作用したと考えられる。加えて、特定の能力要素による差異や「性別」と「学年」に応じた運営課題が抽出されたことも、社会人基礎力によって本プログラムを評価した成果として認識できる。今回、スポーツボランティアによる参加学生の成長を具体的に数字化して示すことができたという点は、今後、大学とJクラブが定期的・継続的に活動を行ってい

く上で有益なものであり、スポーツボランティアの新たな可能性を探求するために必要な試みであったと言える。

しかし、測定項目の統計的手続きにおいて、全ての能力要素で第一主成分のみが抽出されたものの、サンプル数が少ないことから、一部の能力要素においては、低い α 係数が示された。特に、今回、削除した「課題発見力」においては、その後の分析ができていないことなどから、研究結果の一般化と測定項目の精緻化には課題が残る。また、本研究では、既存の社会人基礎力概念を援用し調査を進めたため、社会人基礎力概念では捉えられないようなスポーツボランティア独自の変化要因について言及できておらず、本研究結果をもとに新たな概念開発が求められる。つまり、本研究の分析枠組みでは、社会人基礎力に関する本プログラムの評価にしか言及できておらず、このことは方法論上の限界であることが指摘されよう。さらに、椿ら(2012)は、社会人基礎力の自己評価のみならず他者評価の必要性についても言及しており、今後はこれらの視点も考慮する必要があるだろう。

注

注1) それぞれの大学において、大学で学んだ専門知識を活用して企業などから与えられた実課題をチームで解決していく、PBL (Project Based Learning: 課題解決型学習) や実践型インターンシップなどの「実践型学習」が実施された。宮城大学では、NESソフトウェア東北や日立東日本ソリューションズ、データコムと連携して、ITの利活用に関する地域課題の発掘と解決策の企画提案ITシステム設計・開発という課題に対してPBLに取り組んだ。その他にも、東京電機大学、武蔵大学、山梨学院大学、愛知学泉大学、中京大学、大阪大学(大学院)において、様々な企業と連携して社会人基礎力育成・評価を行うモデル事業が実施されている。

注2) 職場における人材育成法の一つ。知識や経験の豊かな先輩社員(メンター)と後輩社員(メンティ)が、原則として1対1の関係を築き、後輩社員のキャリア形成上の課題や悩みについて、先輩社員がサポートする制度で、メンタープログラムともいう。メンターは優れた指導者、助言者などを意味する英語である。

文献

- Cohen, J. (1988) *Statistical Power Analysis for the Behavioral Sciences* (2nd Edition). L. Erlbaum Associates.
- Field, A. & Hole, G. (2003) *How to design and report experiments*. Sage Publications.
- Field, A. (2005) *Discovering statistics using SPSS* (2nd Edition). Sage Publications.
- 本多美美子・金高宏文・竹下俊一(2012) 鹿屋体育大学生の社会人基礎力に関する研究-性,学年,専攻課程による比較-. 学術研究紀要, 44: 1-6.
- 福谷洋子・大草智子(2014) 看護師としての成長を支援する「社会人基礎力評価」を導入した新人教育(特集 新人研修見直しの視点:求める看護師は育っているか). 看護展望, 39(4): 349-356.
- 金崎良三(2005) スポーツ・ボランティア研究(1) 大学生のスポーツ・ボランティア活動についての意義と実態. 佐賀大学文化教育学部研究論文集, 9(2): 201-212.
- 川元克秀(2000) 福祉教育・ボランティア学習活動参加後の学習者のボランティア活動意欲の変容. 社会福祉学, 41(1): 121-134.
- 経済産業省(2006)「社会人基礎力に関する研究会」中間とりまとめ.
- 経済産業省(2008) 今日から始める社会人基礎力の育成と評価 将来のニッポンを支える若者があふれ出す!. 角川学芸出版.
- 経済産業省(2010) 社会人基礎力 育成の手引き. 朝日新聞出版.
- 小塩真司(2011) SPSSとAmosによる心理・

- 調査データ解析（第2版）. 東京図書.
- 工藤保子・横山文人・池田勝（1995）スポーツボランティアに関する調査研究：SSFスポーツライフ・データ1994の全国調査から. 日本体育学会大会号, 46：202.
- 真鍋和博（2010）インターンシップタイプによる基礎力向上効果と就職活動への影響. 日本インターンシップ学会年報, 13：9-17.
- 松野光範・佐野薫・酒井博章（2012）スポーツボランティア組織に参加する動機づけ要因の検証：コンサドーレ札幌のボランティア組織のアンケート調査より. 大阪学院大学経済論集, 26（2）：135-154.
- 松尾哲也（1998）スポーツボランティア活動参与の規程要因に関する実証的研究-スポーツ及び生涯学習に関する認知／行動要因の影響を中心に. 福岡大学体育学研究, 28（2）：33-51.
- 水本篤・竹内理（2008）研究論文における効果量の報告のために-基礎的概念と注意点-. 英語教育研究, 31：57-66.
- 文部科学省（2002）青少年の奉仕活動・体験活動の推進方策等について.
- 内藤正和（2007）大学生におけるスポーツ・ボランティア活動へのニーズに関する研究. 愛知学院大学心身科学部紀要, 2007（3）：21-29.
- 錦裕二・山口泰雄・長ヶ原誠・野川春夫・菊池秀夫（1991）地域スポーツイベントにおけるボランティア活動の研究：初参加者と活動継続者の継続意欲の規定要因の比較. 日本体育学会大会号, 42：442.
- 西道実（2011）社会人基礎力の測定に関する尺度構成の試み. プール学院大学研究紀要, 51：217-228.
- 大山祐太・増田貴人・安藤房治（2012）知的障害者のスポーツ活動における大学生ボランティアの継続参加プロセス：スペシャルオリンピックス日本・青森の事例から. 障害者スポーツ科学, 10（1）：35-44.
- 鈴木康文・佐藤和典・永井智（2013）大学教育の中における課外活動の教育的意義：つくば国際トレーナー活動研究会における取組み. 医療保健学研究,（4）：51-60.
- 椿美智子・松田洋平・土井由希子・野口裕貴（2012）理工系大学生の社会人基礎力向上のための要素間の関係についての研究. 行動計量学, 39（1）：11-32.
- 辻多聞（2011）ボランティア体験型講義による学生の自主的活動意識の醸成：山口大学講義「ボランティアと自主活動」をもとに. 山口大学教育, 8：17-28.
- 山口泰雄・菊池秀夫・野川春夫（1989）スポーツイベントにおけるボランティア活動の継続要因の分析. 日本体育学会大会号, 40：158.
- 山田力也（2007）障害者スポーツボランティア活動者の意識変容と役割構造に関する研究. 永原学園西九州大学・佐賀短期大学紀要, 37：11-18.
- 山岡義卓（2014）教育ノート 企業との連携によるプロジェクト型授業の運営および大学生の学習効果について. 神奈川大学国際経営論集, 47：183-194.
- 山下博武・行實徹平（2015）徳島ヴォルティスにおける運営ボランティア参加学生の意識変容プロセス. 体育・スポーツ経営学研究, 28（1）：33-52.
- 行實鉄平（2008）大学と総合型地域スポーツクラブの連携に関する研究-K大学生の組織コミットメントに着目して. 久留米大学健康・スポーツ科学センター研究紀要, 16：25-36.